一九歳からの償いの道　永山則夫さんとH・Mさんのこと

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会「そばの会」
東京都荒川区南千住1-59-6-302
http://sobanokai.my.coocan.jp/

連続ピストル射殺事件（一九六九年）

永山則夫さんは貧困と暴力の中で生まれ育ち、生きる希望を全て失い一九歳の時に、四人の生命を無差別に殺（あや）めるという罪を犯しました。

生まれてきたことに意味が持てず、自分の言葉さえ見つからない中で常に生きる痛みしか感じられなかった中での、許されない凶行がその時の表現でした。

彼は被告として、審理に臨んでいく過程で膨大な読書をして、感じるもの学んだものを書き続けて、これまでの自分の生き方を振り返り、犯した罪の重さを感じて償い続けました。

これからの時代に、二度と自分のような境遇の者が出ないように、それを文学作品にして発表し、被害者への償いにしていました。

一九九七年七月。生きて償い続けていた彼に死刑は執行されました。四八歳でした。

生きて償いたい彼の道はそこで断たれました。

三府県連続リンチ殺人事件（一九九四年）

H・Mさんは、元暴力団員だった父と育児放棄する母のもとで暴力と無関心、他者からの差別と虐（いじ）めの中で少年時代と思春期を過ごしました。

一六歳で社会に放り出された時、彼の周りには同じような境遇の者しかおらず、その中で互いに社会への矛盾に対して怒りを抱き続けていました。

一九歳になる数ヶ月前に、そうした思いが爆発して、理不尽な暴力に発展し、四人の生命を殺（あや）める事件を起こしてしまいました。

獄中で彼は、教誨師から聖書を教えてもらい自分の罪と向き合って、キリスト教の信仰の道に入りました。犯した罪と向き合いながら、償いを言葉にして獄中や獄外の情報誌に投稿しつつ被害者への償いを続けています。二〇一一年四月に彼の死刑は確定しました。四七歳になった彼は今でも信仰と、制限された中での言葉の発信で生きて償う道を歩んでいます。

償いは生きてこそ

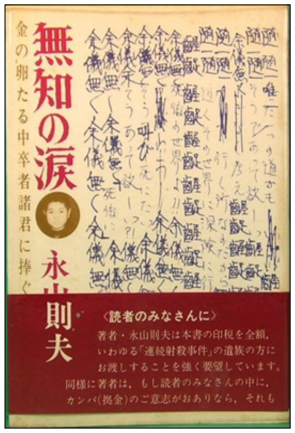
永山則夫さんは、執行されて二六年目の今でも、出版物の印税で償い続けています。

死刑執行の直前、永山さんは「本の印税を日本と世界の貧しい子どもたちへ、特にペルーの貧しい子どもたちに使ってほしい」と遺言を残し、それが今でも『永山子ども基金』として引き継がれているからです。

H・Mさんは、執行の命令（今日か明日かいつか）に心をすり減らしながらも、言葉を発信してできる限りの償いを続けています。

死刑は、生きて償う心の営みを無情に断ちます。

生きて償う方法を、二人を通じて考えてみませんか。（Y）



永山さんの著書『無知の涙』
他に『人民をわすれたカナリアたち』など多数